

シベリア抑留記

高知県 篠原 精一郎

海兵団入団

昭和十八（一九四三）年八月十日、十五歳であつた。いよいよ佐世保相ノ浦海兵団に入団することになった。母は数カ月前から、海軍へ入つた方の家を訪ねて準備してくれた。フンドシは多い

ほどよい、怪我の応急手当、タオルの代用、船酔いの後始末用など用途が多いからと、木綿の少ないときに二十枚ほどつくってくれた。正露丸、梅肉エキスなど何瓶も持たせてくれた。当日は親戚一同、部落の方々、友人など大勢集まり、盛大な壮行会を開いてくれた。そうして歓呼の声に送られ、西佐川駅まで見送ってくれた。駅前で初めて挨拶をして汽車に乗った。母は「死んだらいいん、生きて帰ってくれ」と何度も言つて見送つて

くれた。

佐世保には海兵団から迎えに来ていて、指示された旅館に着き、それぞれの分隊と班を告げ、明日の概略を説明して帰つた。八月十日、緊張して海兵団の門をくぐつた。受け持ちの教班長が班員をまとめて兵舎に引率した。

入団式を終え兵舎に帰ると、衣囊に入つた軍服一式を支給された。さつそく軍服に着替えて、ほやほやの海軍軍人の出来上がりである。志整第一六六四号が私の兵籍番号である。

この日を境に教班長の態度が一変した。海兵団は海軍軍人としての基礎を叩き込むところである。短艇・乗艦・陸戦・水泳・手旗・通船・体操・一般教養など、毎日厳しい猛特訓が続いた。海軍では負けることと遅いことは許されず、短艇などでは手の平や腰の皮がはげるほど厳しく鍛えられた。

もし他班に負けようものなら後が大変で、吊床用のフックへのぶら下がりや腕立て伏せ、互いに

向き合つての殴り合い、ウグイスの谷渡りなどの罰直が待つており、互いに負けないため必死であつた。そうした厳しい訓練が続き、相ノ浦海兵

団では新兵の総ざらえとも言える二泊三日の陸戦演習が大野ケ原で行われた。陸戦隊員は略服に白脚絆をつけ、三八銃を担ぎ大野ケ原まで行軍し、赤白に分かれて演習となる。連日砂の上を駆けめぐり、くたくたに疲れているのに最終コースでは互いに追いつ追われつ追撃・退却戦が行われ、倒れる兵が続出する辛い演習であつた。そうして辛く厳しい新兵教育を修了して、いよいよ実施部隊へ配属されることになり、皆さん、それぞれの部隊へと散つていった。私は吉本政雄（鹿児島県指宿）、西岡一城（高知県香美郡山田町）、藤田君（長崎県佐世保市）など二十数人と、佐世保海軍航空隊へ配属された。

佐世保海軍航空隊

佐世保海軍航空隊は、当時の海軍では「鬼の佐

空」と恐れられていた。その鬼の佐空に新兵として配属されたからたまらない。

海軍の朝は「総員起し十五分前」の号令で始まる。続いて「総員起し五分前」の号令。その間に用便など済まして起床後に備える。「総員起し」で一斉に飛び起き、吊床を四十五秒で縛り上げ甲板掃除にかかる。雑布（そうふ・麻綱をほぐしたもの）で床を磨く。

先任兵長が「精神注入棒」と書いたバットで床板を叩きながら「回れ回れ」の号令をかける。掃除と言うより新兵いじめが目的である。掃除が終わると、息つく間もなく朝食の準備である。網に入れた班員十二人分の食器とヤカンを持ち、三人くらいで炊事場へ走り、食器は熱湯に漬けて消毒し、飯・おかず・汁の入った食缶を持ち帰り、班長から順に盛り付けして食事となるが、食事中も常に上官の顔色を注意し、盛り付けが気に入ってもらえたかとか、班長が一口お茶を飲むごとに「お願いします」と言つて注ぎに行き、しかも新

兵は早食いでなければいけない。そうして後始末を終えると飛行場へ一目散に走る。

佐世保航空隊は水上機の部隊で、海岸には広い滑走台があり、離着水のたびに海上へ引き下ろしたり引き上げたりしていた。私たちは一応整備兵だが、整備のことは全くわからない。我々新兵は上司のギヤー取りとか、飛行機を押したり引いたり、一日じゅうどなられながら追い回されていた。夕食後は「総員吊床下ろし」があり、巡検が始まると全員吊床に滑り込み息を殺して終わるのを待ち、「巡検終わり。煙草盆出せ」の号令で一斉に起き出し、本来なら消灯まで本を読んだり手紙を書いたり、雑談で一番楽しい自由時間のはずだが、我々下級兵には一番辛い時間となる。先任兵長より「甲板整列」の号令がかかる。今日は気合いが抜けていたとか仕事が遅かったとか、あることないこと注意され、よほど機嫌の良いときはそれで解散だが、少しでもミスがあつたり虫の居どころが悪いとバッテリーのお見舞いとなる。二、

三本は軽い方で、四、五本になるときもある。先任兵長の気分次第である。足を開き尻を突き出し、腕は斜め上に突き上げて肛門を力いっぱい締め、殴られるのに「お願いします」である。一本で尻から頭に突き抜けるような痛みが走る。三本くらいで尻は腫れ上がり、血がにじみ出る。やっと解放されると、次は上等兵が新兵に、今日のバッテリーは貴様らの気合いが入ってないためだとアゴを三、四発殴られ、腕立て伏せをさせられるのが常である。

それらの行動が済むと、次は班長及び下士官の物の洗濯である。佐世保の冬は寒い。上衣を脱ぎズボンをまくり上げ、手でこすったり足で踏んだりして洗い、ロープに掛けて乾かすが、盗まれたり間違われないうように下で見張る。各班の新兵が寒さに震えつつ半乾きになるのを待つて兵舎に帰り自班の隅に乾かし、やっと一日の終わりである。疲れてくたくたの体で吊床に潜り込み、一眠りしたらまたもや「ポピーポ」の号笛で「総員起

し」である。

新兵の一等兵、上等兵時代は、「精神注入棒」と書いたバットで週に二、三度は殴られるため、腰は腫れ上がり血が出ているため、痛くてうつ伏せに寝た。食事のときも中腰で、一メートル動くにも駆け足のため腰が痛くて参った。夜は新兵仲間と互いに腰にヨーチンを塗り合って寝た。

このように厳しく辛い毎日の連続でも何とか辛抱できたのは、当時の軍隊は「絶対服従」が当たり前だったからだと思うが、しかし我々の一期前の新兵の一人は首吊り自殺したと聞いた。今は我々新兵全員が一日も早くこの佐世保航空隊から抜け出したい一心であった。ちょうどその頃、沖繩と奄美大島への派遣隊の募集があり、私は幸運にも奄美大島派遣隊行きを命ぜられた。

吉本政雄君は沖繩へ行くことになった。そのときの嬉しさは忘れられない。

奄美大島古仁屋派遣隊

佐世保から輸送船に便乗して古仁屋に着いたが、大型船の港がなく、沖合いからランチで海岸に上陸した。一面にタコノキが茂り、至る所にパイヤの木が生えており、山一面に蘇鉄が赤い実をつけていて、南の島という感じであった。

我々新兵は隊に入り、各班に配属された。派遣隊は基本的には佐世保と大差はないが、隊員が少ないこともあり、若干明るい感じで嬉しかった。

これも水上機の基地で、零式水上偵察機が六、七機配属されていた。基地が狭いためほとんど海上に繋留していた。

整備科には翌日の飛行予定が回され、それに従って作業が進められていた。発進前には繋留された飛行機を浜に引き寄せ、ガソリンを補給し暖気運転を行い、エンジンや各種計器の状態、補助翼の作動状態など、すべて念入りに調べ、爆弾を搭載し、搭乗員に引き渡して飛び立たせる。予定通り発進させ終わると、我々は少しの暇を見て兵

舎に帰り掃除など行すが、そのうちにも先に発進した飛行機が帰って来る。帰還した飛行機は浜に乗り付けるが、我々若い整備兵は胸までのゴム服を着て海に入り、波に流されないようにして搭乗員を降ろし、故障などなければ海上に繫留して次の飛行に備える。夜間飛行は緊急時以外はなかったが、台風ときは大変だった。飛行機は風を受けるようにできており、強い風でブイが切れ流されるので、全機を浜に引き寄せ綱で引っ張り、一方では海に入り大波を頭から浴び、台風が過ぎるまで飛行機を守らなければいけなかった。

海軍で一番の楽しみは上陸（外出）である。当時の古仁屋は田舎の漁師町で、家並も小さく板葺きの家が多く、商店もなかった。我々の外出時には、蘇鉄の実を粉にしてつくった団子や、ちよつとした菓子など棚に並べて売っていた程度であった。それでも時間と規則に縛られ、一日じゅう追い回されている我々新兵には、誰に拘束されることなく自由に羽根を伸ばすことのできる唯一の楽

しい時間であった。

その頃、古仁屋派遣隊にシャクリ（昇進遅れ）の一等兵曹がいた。いつもバットを引きずって歩き、威張り散らしていた。若い兵隊には鬼より恐い存在で恐れられていた。そうした日頃の行動に怒った若い搭乗員の士官数人が我々下士官、兵、全員の前にこの一等兵曹を呼び出し、日頃の行動を厳しく注意しバットで殴り出した。五、六本目あたりから彼は唸り声と悲鳴を上げ出したが、なおも殴り続け、ズボンの尻は血で赤く染まった。十四、五本で気絶して倒れた。それから四、五日は食事もできず唸りながら一週間くらい寝込んだが、同情する人もなかった。むしろ我々若い兵隊は心の中で拍手喝采した。その事件があつてから意地の悪い下士官や兵長も少しはおとなしくなり、バツターの回数も少し減り、嬉しかった。

古仁屋派遣隊に来て三カ月ぐらいたつた頃だった。我々は整備術練習生（整備術の学校）行きを命ぜられ、名瀬から船で佐世保航空隊に帰り、そ

ここで台湾の第二台南海軍航空隊が整備術練習生の学校であることを知らされた。数日後、輸送船に便乗して佐世保を出港した。

途中、潜水艦を避けるため大きく蛇行し、警戒しながら進んで行く。輸送船上に一日一回か二回飛来し警護してくれる古仁屋基地の偵察機に感謝しながら無事、台湾の高雄港に入った。私より一期早く台湾に向かった西森元義君（吾川郡久喜）、高木久次君（佐川町尾川）などの乗った輸送船は花蓮港沖で撃沈され、木枠のついたドラム缶に大勢が群がりつかまることができず、木枠につかまった人のバンドにつかまって浮いていたところ、運よく海防艦が通りかかり十五時間ぶりに救助された。しかし西森君は肺炎に罹り、三カ月余り入院して助かったが、死んだ人も多かったと聞いた。その点、我々は幸運であった。

船から眺める高雄は、海岸にはヤシの木が茂り、太陽は強く照りつけ、バナナやガジュマルの木が茂り、南国に來たという実感が湧いてきた。

港に停泊した輸送船をバナナ売りの小船が取り囲み、長い紐のついたカゴで売っていた。我々はバナナなどめつたに食べたことがなく、珍しくて皆で腹が痛くなるほど食べたものであった。

汽車で台南まで行き、第二台南海軍航空隊の整備術練習生に入隊した。昭和十九年四月であった。吉本政雄、西森元義、西岡一城、仙波武など同期で入隊した。

整備術練習生

入隊すると直ちに分隊と班に分けられた。基本的には海兵団と同じで、何をするにも班ごと、分隊ごとに競い合わせて厳しい教育が始まった。海兵団と違うところは徹底した専門教育で、飛行機の構造原理からエンジンについては部品の一つまで徹底した教育が行われ、整備のすべてが完全にできるようになるまで科目ごとに試験が行われた。練習生の成績はいつまでもついて回り、昇進にも影響するし、また成績が悪いと厳しい罰直が

あるので皆、必死で勉強した。

ここで一番の楽しみは上陸だけだが、航空隊を一歩外に出ると、道の両側には一面に田園が広がり水牛が群れており、バナナやサトウキビ、パイナップル畑が見渡す限り続き、三十分ほどで台南の町に出た。見る物すべてが珍しく、食べ物も豊富で果物や菓子など何でもあり、しかも大変安く売られていた。

同郷の高木久次君とは分隊が違っていたが外出は二度ほど一緒になり、二人で歩き回り、疲れたら海軍用集会所で休んではまた見物に出かけるというぐあいだ、十分に食べ十分に遊んで一日の休暇を存分に楽しんだ。外出中、驚いたことに、足を木靴で固めてコロコロしながらやつと歩いているお婆さんをたびたび見かけた。昔、中国では嫁を売買していたため、逃げられないように子供の頃から足に木柶をはめたと聞いていて、それは歴史上のことだと思っていたが、昭和十九年ごろ現実を見て驚いた。

外出ではこんな悲劇もあった。練習生は遊郭には近寄れないことになっていたが、徴兵検査で入隊した兵隊などには不心得者も少しはいたようで、その中の一人が我々の分隊から出た。病気をもらったため知れるようになり、海軍ではすべて全体責任であったため、分隊全員が一カ月の外出止めとなった。分隊の教官は腹立ちまぎれに、療養のため吊床で休んでいるのを引きずり降ろし、毎夜のようにバットで殴り、ズボンに血で真っ赤に染まり、叩くたびに血が飛び散り悲鳴を上げる。気絶して倒れると柱に縛りつけて叩いた。叩き終わると担ぎ上げて寝かしてやる。一人で起き上がることも食事をすることもできない状態であるが、我々も分刻みで追い回されているため面倒を見てやることもできない。数日後、衰弱がひどいため入院させたが、後で死んだと聞いた。皆、悲しみと怒りを覚えたものであった。

今考えると、昔の海軍はずいぶん無茶な非人間的なことを行っていたものだと思う。このように

精神面だけのことをやっていたので、戦争にも負けるべくして負けたのだと思う。

練習生の期間はこれまで一年だったようだが、我々のときは六カ月で覚えろというわけで猛勉強が続けられ、何とか無事卒業することができた。

左の腕に桜のマークが付き、いよいよ待望の章持ちとなった。同時期に整備兵長に昇進し、名実ともに一人前の海軍兵となった。ちょうどその頃、昭和十九年九月頃だったと記憶している。台湾沖航空戦が始まり、台南航空隊は大変な忙しさで、我々も応援に駆けつけた。

台南航空隊は零戦の航空隊で、昼も夜も出撃し、そして帰還してくる。目の回るほどの忙しさであった。そのうちに、たびたび敵機の襲撃を受けるようになり、そのたびに航空隊の上空で零戦との激しい空中戦が展開された。

その頃、我々にとって忘れることのできない事故が起きた。海兵団当時からの友人で愛媛県出身の仙波武君が、零戦の回転しているプロペラの中

へ間違つて走り込み、頭を割られ即死した。多くの飛行機が一斉にエンジンを始動していると、止めている飛行機との区別がつきにくいし、特に夜間は危なかった。それに忙しさが加わり、間違つたと思う。本当にかわいそうであった。

そうした最中に私や西森元義君、西岡一城君、吉本政雄君など十数人は東港海軍航空隊へ派遣された。

東港海軍航空隊

東港は台湾の最も南端にあり、飛行艇の航空隊であった。配属された分隊と班に着いたのは昼前であったので、早速掃除をしたりテーブルを並べたりしていたら、若い兵三人が食事準備に帰ってきた。転属してきた旨を告げると、部下ができたと思つて大変喜んで指図してくれて準備した。

班長以下全員食卓につき、正装して名前と階級を告げ、挨拶して食事となる。食後に先ほどの若い兵が大変恐縮して謝るので、聞くと、四歳上だ

が十九年兵であった。

初めての部下ができたことが正直言って大変嬉しかったことを覚えている。しかし、さんざんいじめられてきた私は、威張るところか情を持って接したので感謝された。

飛行艇は海上で運搬車に乗せて陸上に引き上げであり、エンジンまでの高さは四メートルほどある。整備は鉄パイプの櫓の上で行うが、エンジン始動は九七大艇の場合はエナーシャースタターと言つて、慣性起動機を人力で回転させ、その回転力を利用して起動する方式のため、エンジン始動となれば、我々若い整備兵は四メートルほどもある翼の上上がり、しかもエンジン近くの翼は油がついて滑りやすい。その上で重いエナーシャーを一分間に百回転近くになるまで回転させる。すると操縦席から「コンタク」の合図があり、素早くハンドルを抜き「コンタク」と復唱して起動レバーを引き始動させる。一回で始動できればよいが、二、三度繰り返されると力持ちでも

ダウンした。始動すると、滑る翼の上でプロペラの風を受けるので転げ落ちそうになる危ない作業であった。その点、二式大艇は電動式で楽だったが、それでも何度も繰り返すとバッテリーが上がリ、エナーシャー始動となった。

飛行艇を発進させるにはトラクターで滑走台から海上に降ろし、浮いたところで、我々が海に飛び込み、運搬車を外し飛び立つてゆく。帰還したときも同じく運搬車を持って海に入り、胴体の両側と後尾の三方所に取り付けるが、波で揺れるため取り付け環にはまりにくいので、二、三人が翼の上上がり調節をとって取り付け陸上に引き上げる。

ここでも台湾沖航空戦の最中で、飛び立つものの、帰還するものと大変な忙しさであった。この航空戦で最初に敵機動部隊を発見したのはこの東港の飛行艇であり、司令長官から賞状をもらった。その頃は二機、三機と同時に帰還することもあり、そのときは整備兵は猫の手も借りたほど

忙しくなる。海に飛び込み運搬車を取り付ける者、翼の上で調節をとる者、後に待機している飛行機の引き上げ準備をする者など、三十数人が作業していた。

ちょうどそのとき、航空戦が始まって以来初めてのグラマンによる奇襲があった。山をかすめるようにして二機のグラマンが突っ込んで来た。気がついたときはすでに目の前に迫っていた。陸上にいた者は近くの防空壕に飛び込んだが、我々海に入っている若い整備兵はほとんど間に合わなかった。私も海に入っていたが、幸い近くにいたため間一髪で助かった。

防空壕の中で、機銃掃射音に続いて爆弾の爆発音を聞き、飛び出して見ると、海中で作業していた二十数人の姿はなく、周辺の海は赤く染まり、飛行艇の残骸だけが残っていた。

全員で海に潜り、遺体の引揚げ作業にかかったが、海の中は目が痛くて十分に見ることができず、手探り足探りで引き揚げた。だが、遺体は損

傷がひどく、引揚げ作業は困難をきわめたが何とか引き揚げ、飛行場に並べて一人一人確認しながら埋葬した。戦争中は僅かの運、不運が生死を分けた。

このように忙しい毎日であったが、航空戦も一段落したので元の第二台南航空隊に帰った。

しかし、数日後には今度は台北の少し北にある九〇一海軍航空隊淡水派遣隊に転属となった。淡水へは西岡一城君と二人だけだった。

九〇一海軍航空隊淡水派遣隊

淡水基地は淡水河の河口にあり、零式水上偵察機六、七機ほどで近海の偵察などの任務に就いていた。ここは比較的明るい感じで嬉しかった。しかし、海軍の厳しさはこの航空隊も同じである。

整備科の作業は、飛行予定に従って何班は何号機というように各班単位で作業に当たった。整備術練習生を出たばかりの我々はまだ未熟で、先輩

を手伝いながら覚えていった。

昭和十九年十月頃だったと思うが、淡水基地もたびたび空襲されるようになり、数度の爆撃で兵舎が全滅し、後片づけのため帰って見ると、なんと不思議なことに私の写真が板壁にピタリと貼りついている。近寄って見ると、胸から腹にかけ爆弾の鋭い破片が二カ所も刺さって貼りついていた。しかも写真は衣囊（軍服、軍帽など一式入れた布袋）の中に入れてあったものである。お守りや写真が身替りになった話は聞いていたが、この写真が本当に私の身替りになってくれたんだと思ひ、感謝しながら外して家に送っていたため、今も大切に持っている。

その頃から次第に空襲が激しくなり、飛行機はすべて壕に入れて待機させ、発進の都度引き出したり壕に入れたり繰り返すこととなり、発進準備中とか引き上げ最中の空襲には大変困った。

こんなこともあった。「敵機来襲」の警報で、我々整備科は飛行機を退避さすため四十人余りが

駆けつけ中、ガソリンタンクに照明弾が命中し、大爆発を起こしてタンクの鉄板の破片が四方に飛び散り、私の前を走っていた十人余りが破片でなぎ倒され、即死したり重傷を負ったりした。仲間からも「篠原、貴様は何と幸運な男だ」と言われるほど運がよかった。

また、こんなこともあった。伊藤忠則兵曹が整備を済ませた飛行機に同乗して試験飛行中にグラマンの急襲があり、慌てた我々は白煙筒で知らせたが気づかず、基地の上空を悠々と旋回して皆をばらはらさせたが、幸い無事故で安堵したこともあった。

空襲で兵舎が全滅してからは炊事は大分離れた山の麓に移したので、食事の都度取りに行くことになった。

その日、私は当番で、我が班の新兵十五人を引率して取りに行く途中、グラマンに急襲された。

私は、持っていた食缶を捨て道端の小さな溝に飛び込むように命令した。ところが、慌てた新兵達

のほとんどは溝に隠れることができないので、一人一人溝に突き落として事なきを得たが、それでも機銃掃射で二人、怪我をした。こうした場合、慣れるまでは目が見えなくなり、死んだり怪我をするのは新兵が多かった。

当時の淡水の整備の連中には、いまだに忘れることができないほどの楽しみがあった。それは、基地内の壕に収容できない飛行機を、淡水河の上流の江頭と言う小さな村落の入江の茂みに退避させていた。そこへ四、五人が交代で管理のため駐在した。元中国人の別荘を住居にし、基地から持ち込んだ食料で自炊した。村人は良い人たちで、野菜やアヒルなど差し入れてくれることもあった。自分達で好きな物を自由に料理して食べるのがこんなに楽しいとは思わなかった。

作業は、フロート内にたまった水あかを定期的に汲み出すのと、一回一回、暖気運転して、エンジンの状態や各種計器のチェックをして、いつでも飛べる状態にしておくことぐらいで、後は遊ん

でなければよかった。

江頭は全くの田舎で、住居や生活様式も昔の面影を残しており、珍しいので見て回り、二キロくらい離れた所に小さな小学校があり、その校長先生が鹿児島出身の方で柚木先生と言ひ、奥さんも大変良い方で、たびたび遊びに行つてご馳走になっていた。そこに十二、三歳の長女洋子ちゃん、と、五、六歳の妹さんがいて、大変可愛く、皆のマスコットになっていた。

このように自由な生活は久しぶりで、本当に楽しかった。当時の仲間が集まれば必ず江頭の話が出るほどである。

昭和二十年四月頃になると、沖縄戦もますます激しさを増し、淡水基地の水上機まで沖縄戦へ出撃命令が下った。出撃機には燃料を満載し、六十キロ爆弾を積み込み、しかもその爆弾は投下できないようにハンドで固定した。後は飛行機もろとも体当たりするしかない。

出撃機の準備が整い、搭乗員は日の丸の鉢巻を

してそれぞれの飛行機に悠然と乗り込み、出撃して行った。燃料を満載し、六十キロ爆弾を搭載した水上機は重くてなかなか離水できない。何度も離水を繰り返しブースターを全開にして唸りながらようやく次々と出撃して行った。その姿が余計に哀れを感じた。

海軍での別れはすべて「帽振れ」で別れるが、この時はいつまでもいつまでも振り続けて別れた。出撃機もそれにこたえて何度も基地の上空を旋回し、何度となく翼を振りながら北の空へ消えて行った。その頃の我々は生とか死とかは考えたこともなかったが、この時ばかりは搭乗員の気持ちを思うとたまらなかった。当時の搭乗員も皆、我々と同じ年代の二十歳前後の若者であった。

こうして全機出撃させた基地は、全員内地に引き揚げることになったが、その中で我々六人が選ばれ、残務整理をして飛行機で帰ることになり、他の全員は船で帰ることになった。

昭和二十年四月十二日頃は沖繩戦の真っ最中で

あり、船で無事帰れる可能性は少なく、無事の帰国を祈りつつ別れた。

残ったのは入江正輝上等整備兵曹（丸亀市塩飽町）、伊藤忠則一等整備兵曹（吾川村大崎）、古市勝良二等整備兵曹（高松市栗林町）、瀬川一等整備兵曹（沖繩県）、西岡一城整備兵長（高知県香美郡土佐山田町天坪）、それに私、篠原整備兵長と、全員、練習生出の優秀な元氣者ばかりであった。

残った我々は急いで残務整理を終え、新竹航空隊から上海経由で内地へ帰るべくトラックに乗り新竹に向かった。途中たびたび空襲に遭い、その都度バナナ畑へ避難しながらで、ずいぶん遅れ夕方になって到着した。飛行場にはすでに輸送機が待機しており、直ちに搭乗して上海に向かった。

上海の龍華海軍航空隊

昭和二十年四月十七日、我々を乗せた輸送機は上海の戌基地に着陸した。そこで給油して内地に

向かうものと思っていたが、どうしたことか、我々を降ろして飛んで行った。

降ろされた我々は、戌基地を見て余りの広さに驚いた。飛行場は幾ら行っても果てしなく広がっていた。戌基地で十三日間滞在し、上海龍華海軍航空隊へ移動した。

龍華航空隊には、吉本政雄君や西森元義君などが中国のアモイから移動して来ており、またも一緒になった。上海では仮入隊のためたびたび外出できた。衛門を出ると中国人が我々から煙草を買うため待っており、当時の「旭光」を四、五箱売ると一日遊ぶ金ができた。上海の街を見物して歩き、ガーデンブリッジや「春は花咲くフランス租界、秋は落葉の南京路」と詩に歌われていたので早速行ってみたが、実物は余りにも違いがっかりした。しかし、どこも珍しくて歩き回って見物した。

こうして上海で二十日ほど滞在し、昭和二十年五月五日、我々、台湾から移動して来た者は、朝

鮮の羅津に新しく基地を造り、その派遣隊へ転属命令が出た。上海駅から鉄道貨車に乗り南京で一泊し、揚子江（長江）を渡り蘇州へ。蘇州では、見渡す限り続く麦畠の中を白い帆を張ったジャンクが縦横に走っていて、まるで陸上を船が通っているように驚いた。

食事は駅々で陸軍が差し入れてくれたが、初めは赤飯だと思つて喜んでいたが、コーリヤンを混ぜた飯で、常食にしていると聞き、海軍との差に気の毒に思った。奉天（瀋陽）、京城（ソウル）を経由し、五月十四日に元山海軍航空隊に着いた。上海を出てから九日目であった。元山航空隊で二十日余り待機し、再編成して再び汽車で羅津に着いたが、新設のためまだ兵舎が完成しておらず、市内で建物を借りて住居にし、そこから基地へ通うことになった。

九〇一海軍航空隊羅津派遣隊

昭和二十年に入ると大陸と内地の航路も、南は

敵潜水艦で危なくなり、北端の羅津港が重要になり、偵察と護衛のため水上機の基地を造ったと聞いた。基地には零式水上偵察機四機が配属されていた。

六月中旬には兵舎も完成し、やっと派遣隊らしくなった。私もその頃は一人前の整備兵長として活躍していた。

昭和二十年八月九日、内地に引き揚げる最後の輸送船団十隻余りが、朝鮮、満州、中国各地から集まった引揚者を乗せ未明に出港するので、その護衛のため我々当番班は午前四時に起床し飛行準備をしていた。そのまさに出港直前、ソ連軍の爆撃機によって全船が羅津港内に撃沈されるのを目撃した。

救護に駆けつけた私達は、その目をおおうばかりの光景に茫然となった。そうして怪我人の救護、死体の収容に目が回るほどだったが、その最中にソ連軍の参戦を知らされた。そこで急遽、わ

ずかな武器を引つ提げて国境に向かったが、圧倒的な武力で計画的に進入してくるソ連軍には抗すすべもなかった。

したがって、私達は途中から南下を始め清津まで逃れた。ところがソ連軍はすでに艦艇で上陸しており、さらに清津川の橋はことごとく陸軍が爆破していた。仕方なく我々は小高い丘にあった清津女学校に立てこもり、最後の一兵まで戦うという事になった。それで交戦ということになったが、数十分後には学校の窓ガラスがソ連軍の銃弾で飛び散ってしまった。

満足の武器を持たない我々海軍はこれに抵抗もできず、やむなく山へ逃げ込んだ。そして夜を待つて清津川を渡ることになり、そこで私と藤田兵長と他一人、斥候を命ぜられ、渡川地点の探索に出かけた。そうしてやつのことで渡れそうな場所とソ連兵の手薄な所を探し出し、本隊のいた場所へ帰ってきた。ところがもぬけの殻である。

私たちの帰りが遅いので待ちきれず先に南下し

てしまっている。仕方なく私たち三人だけで南への逃避行が始まった。やっとの思いで清津川にたどり着いたが、前日の雨のため水流が激しく、小銃と服を背負いようやく対岸に泳ぎ着き、四十メートルくらいの岩肌を這い昇り中、対岸のソ連兵に見つかり自動小銃で射撃され出した。弾が近くの岩肌に当たりはね返る音に、これで最後かと諦めていたが、幸運にも陸軍の兵隊七、八人が岸の上を通りかかり、機関銃で応戦してくれて命拾いした。

逃避行の途中で目撃した一般邦人の引揚げ風景は悲惨であった。親にはぐれた子供、疲労で歩けなくなった親子連れ、老人たちが手を合わせ足に取りすがって助けを求めるのをどうすることもできず見捨てて逃げた当時のことがいまだに頭から離れない。

途中、苦労を重ねながらの逃避行であったが、特に食べ物に困り、まだ青い小さなリングを食べべたり、空家に入り残りものを食べたたりしたため、

藤田兵長が酷い下痢になり、衰弱し歩けなくなり困っていたが、幸いにも別れて六日目に偶然にも本隊と合流できた。そこで、場所は忘れたが最後の汽車に乗ることができ、ようやく元山航空隊にたどり着いた。八月十七日であった。

元山航空隊ではまだ徹底抗戦だと言って、飛行場へ出て陸戦訓練を行っていた。ところが突然、ソ連艇が白旗を掲げて元山港へ入ってきて「日本は無条件降伏している。抵抗して死ぬより、武装解除すればダモイ・トウキョウ、日本へ帰してやろう」というソ連のことばを信じ、武装解除することになった。すべての武器を持って飛行場に集合し、持った武器は足元に置いて別の場所へ集められた。するとたちまち自動小銃を手にしたソ連兵に囲まれ、身柄を拘束された。これが地獄のシベリアに拉致される第一歩になるうとは夢にも考えなかった。むしろ私たちはこの武装解除で、長かった戦争もこれで終わった、いよいよ懐かしの故国に帰れるのだ、という喜びでいっぱいだった。

た。

八月二十五日、ソ連側から「いよいよダモイ・トウキョウである。しかし日本は焼け野原になっているから、物資はできるだけ多く持って帰るよう」という指示があつた。そこでみんな、それぞれに大きな荷物を背負い興南の港に向かつて歩いたが、着いたところは富坪というところの陸軍の演習場跡だつた。そこで日本からの船を待つと言われ、およそ二カ月近く拘束された。その間にソ連兵は一日に数回やつてきて、時計、万年筆と、目ぼしい物はすべて取り上げた。そうして両腕に五個、十個と時計を巻いている兵隊もいた。驚いたことに、彼らは時計を初めて見るということだつた。その無知のおかげで、とまった時計の修理をしてやると称して、ネジを巻いてやるだけで黒パンや煙草を稼がせてもらった。仕事といえど、たまにソ連兵に連れられて作業に出る程度だつた。ところが、その作業中にソ連兵が日本の婦女子を暴行する現場を見かけたが、どうするこ

ともしてやれないので、やりきれない憤りを覚えた。

そうして、およそ二カ月近く過ぎたころ、待ちに待った日本から迎えの船が来たとソ連兵から聞かされた。今度こそ本当に日本へ帰れるのだ。荷物は捨てないように全部持たされて興南の港まで歩いた。途中、ソ連兵も帽子で船の形をつくり「ダモイ・トウキョウ」と、一緒に喜んでくれて船に乗った。

昭和二十年十月二十一日のことであつた。

シベリア抑留

日本に帰してくれることを信じて船に乗った。行軍疲れと、故国に帰れる安心感とで甲板で寝た。星が美しかった。だがよく見ると、船は北へ向かっているのではないか。私たち海軍はただならぬのに気づいたが、大方の陸軍兵は日本へ帰れるのだと信じて疑っていないようだった。二日後、港に入り陸地が近づいてくる。見なれぬ風景に驚

いていると、屈強なソ連兵が自動小銃を持ってドサドサと乗船してきて「ダワイ、ダワイ、下船しろ！」というのである。私たちはあまりの見事なだまされ方にただ呆然と立ちすくんでいた。

すると再び「ダワイ、ダワイ」の声と銃剣でつつかれ、まるで屠場に引かれてゆく子羊のようにとぼとぼと歩き出した。途中途中で野宿しながらの行軍であった。十月だったが夜は寒くて眠れなかった。数日後にやっとたどり着いた収容所はスーチャンという小さな村落だった。鉄条網を張りめぐらした収容所に入ると、にわか造りのバラックが立ち並んでいた。苦勞して持ち運んだ荷物はすべて没収され、着たきりスズメにされた。ともあれ夜が来て、生まれて初めて黒パンがほんの少し配給があり空腹をしのいで寝たが、二度と帰れないという噂と、これから始まる収容所生活への不安でなかなか眠れなかった。

数日後、黒パン少しと水のような薄いスープを飲んで、早速ツルハシとスコップを持たされ、鉞

脈探しといって山の峰を幅五十センチ、深さ二メートルくらいの溝を数千メートルにわたり掘り続け、数年ぶりに鋤を持つ手は肉刺まがつぶれ出血した。初めてノルマの厳しさを思い知らされた。空腹と栄養失調からくる体力の衰えと、これから先の厳しい労働にますます不安を覚えた。

次の仕事は鉄道造りであった。時はすでに十一月中旬、土は凍っており、掘るのに大変な苦勞をした。もちろんここでもノルマが課せられ、二人一組で何メートル盛土をせよと決められていた。ノルマの達成状況で生きる極限の食料もさらに減らされ、体力のない者はますます衰弱していった。しまいにはソ連兵の目を盗み、雪をアンコにして完成させた。しかし、その頃から戦友は栄養失調と疲勞でバタバタと倒れていった。私の班で最初の犠牲者は、長崎県の藤田整備兵長だった。私の横で寝ていたが、夜中にいつもより寒いので目が覚めた。そのとき体に触れるとすでに死んでいた。

ソ連兵の指示で、着ているものはすべて脱がされ丸裸にされた。死人にさせておくのはもったいないという考え方であろう。その脱いだ衣服をソ連兵が持ち去ろうとすると、光るものがポトリと落ちた。すばやく拾ってみると、成田山のお守りだった。連れて帰ってほしい一念で私に預けたのだらうと思ひ、今もお守りとして肌身離さず持っている。できたら何とかして藤田の遺族を探しお返ししたいと考えている。とにかくその日一日で死亡者が十五、六体にもなつて、埋めることになつた。ところが土が凍っているので掘れない。そこで火を焚いて土を解かしながらようやく掘つた穴に、カチカチに凍つた遺体をちょうど大根漬けのように交互に詰め込んで埋葬した。それから後も、冬の最初の数カ月は毎日数人、あるいは十数人と死んでいった。

特に夜中の死亡者が多く、昨夜は何人だった、今夜は何人死ぬだろうか……と噂しながら寝た。あまりの数にもはや埋葬はできず、死体はすべて

丸裸にされて、椽木を積んだように積み上げられていった。死体の間に吹き込んだ粉雪を払うと、戦友といつでも会うことができた。しかし、もはや特別な感情はなくなつていた。

その遺体もいつの間にか馬車で運び出されていくが、死体は次から次へと積まれて、なくなることはなかつた。収容所の部隊名は難波大隊と言つて、陸軍の中に我々海軍が少し入つた混成部隊で、入ソ当時は千人余りと聞いていたが、明くる年の春までに三百人近くが死亡したということであつた。

そうした辛い毎日が続いていたある日のこと、突然、家族に手紙を出させてやると言われた。内容は「ソ連の温かい恩典に浴し、元気で働いている。ご安心下さい」と書かされた。ずいぶん矛盾した内容だったが、仕方なくみんな同文で書いた。それでも帰国したらその手紙が届いていて、生きていることがわかり安心したとのことだつた。

次の仕事は炭坑での石炭掘りだった。入り口でカンテラとツルハシ、スコップを渡され、来る日も来る日も暗い坑内で黙々と石炭を掘り続けさせられた。この坑内は石炭層が、一・二メートルから一・四メートルしかなくて真つ暗で天井が低いため、馴れるまではすごく恐ろしかった。作業は三交代制で、一組ごとにトロッコ何台と厳しいノルマが課せられ、ここでもノルマの達成状態で食事が増減され、体力のない者はますます弱っていった。特に夜間勤務のときはこたえた。何しろその頃になると全員栄養失調で、元気な者はほとんどいなくなっていた。収容所と炭坑を行き来する途中、ジャガイモを拾って帰り、ストーブで焼いたら馬糞だったという話もある。

そうして春になるとノビルという草をソ連兵の目を盗んでとって帰り、皆で分けて食べた。西森元義君の班では、福寿草に似た草を食べて泡を吹いて死んだ兵隊もいた。秋の薪取りは、早く伐採を済ませ皆でドングリを拾って空缶の食器で煮て

食った。すごく渋かったが、食べられるものなら何でもよかった。あるとき炊事用の水を運ぶロバが死んだ。収容所の隅に置いたが、朝になるとほとんどもが消えていたのでソ連兵に詰問されたが、夜中に食べてしまった後だった。またソ連将校の飼ひ猫がいなくなり、ヤポンスキーが食ったと言つて大変な立腹で調査されたが、食った犯人はわからなかった。こんな事もあった。隣の班の一人が炭坑の近くで遊んでいた犬をタポールという斧で殺し、防寒外套の下に隠して持ち帰り、ストーブで焼いて皆で食ったが、さすがにうまくなかった。

収容所の生活

ここで収容所の生活について語ると、まず食事は当番兵が樽を持って炊事場に行き部隊名と人数を告げると、大きなヒシヤク（一杯で何人分となっている）ですくってくれた。それを各班に持ち帰り、全員が円座を組んで注目している中で当

番兵が分配を始める。食料は岩塩の湯の中に少量の油と豆、コウリヤン、粟などが入っていた。中には穀物がほとんど入っていないときもあった。

腹もちのよい豆粒などはすりつぶして公平に分けた。食器は缶詰の空缶（高さ八センチぐらい）に普通七〇パーセントぐらいで、箸は必要なく、皆、手製のスプーンを使用した。黒パンは初めてのうちは目分量で分けたが、飢えがひどくなるにつれ手製のハカリで分けるようになった。しかも耳は腹もちがよいため先に切り取り、別に分配した。その頃になると、夕方暗くなつての食料取りは、後ろからすくい取られる事件がひんばんに起こり、数人の護衛がつくようになった。

また隣の班では、食器である缶の底を下へ凹ませ、その分多く入るようにしていた人が皆から制裁を受けていた。

飢えと疲労と絶望とで全く人間性を失い、恥も外聞もない、ただ生きんがための動物のようなものだった。その年の正月、特に食料が不足し、こ

れがこたえてずいぶんと死んだ。このように死亡の多かつた一つの原因は、食料の横流しだった。そのため収容所長は責任をとらされて解任され、重労働の刑に処せられたということであった。

それといま一つ私たちの目についたことは、初めのうちの死体は解剖室に運ばれ、私たちの目の前で解剖が行われていたことである。ソ連の軍医は死因の究明と称していたが、実際は彼らの勉強のためにやっていたと思う。

住居は深さ一・五メートル、幅五メートル、長さ五〇メートルぐらいの穴を掘り、屋根にはテントを張った穴倉住居で、三十棟ぐらい並んでいた。寝床は板張りで二段になっていた。一枚あてもらった毛布を出し合つて敷き、頭と足を交互にし、残つた毛布と防寒外套をかぶつて、寒さとシラミに悩まされながら寝た。屋根のテントは私たちの吐く息が凍り付き、さながら冷蔵庫の中で寝ているようだった。

また冬の便所が大変で、大便と小便を別にしな

ければならなかった。大便は一メートルぐらい高いところから五、六人が一列に並んで用を足し、下でスコップを持った当番兵が直ちにすくって取った。小便は、一月頃になると小便の山ができた。裾が広がるので階段をつけて上に昇り、用が済んだら滑り下りた。春になると、解けては凍り凍っては解け、消えるまでが大変だった。

ところで、抑留一カ月過ぎからシラミがわき出し、縫目にいっぱいになったシラミは一面に広がった。爪やヘアでつぶしたが間に合わず、次から次へとわいて栄養失調の体をさらに弱らせた。休みの日などはシラミ退治で暮れた。

それから、話といえはお国自慢の食べ物の話に終始した。また病気には薬がなく、腹の病気にはすべて柳の木を炭にして大量に飲んだりした。冬にはビタミンCの不足で壊血病にかかり、歯ぐきから血が出たり血が止まらなくなったりした。そこで、これに対応するため松葉を煎じて飲んだものである。何様こんなありさまだから、まず重い

病気は助からなかった。顔を洗う、歯を磨く、ヒゲを剃るなどは抑留中一度もさせてもらえなかった。

風呂は抑留一年目に一度だけ入れてもらった。蒸気の部屋に入り、桶に二、三杯の湯をもらって洗ったが、皮膚がはげるようにアカが落ちた。だが、数日後にはまた元どおりシラミに悩まされ通した。

抑留当時は、掛け算を知らないソ連将校に驚いた。朝夕の点呼時、四列に並び、「番号」で直ちに数を報告する日本兵に、でたらめを言うなど怒って信じなかった。寒空で五列に並び変えて、少し数えてはまた元へ返り、延々と時間を費やして点呼をとるソ連将校のやり方に、寒さと空腹で参ったものである。時計や万年筆を持ち、頭のよい日本軍がわずか数日でどうして降伏したか、不思議がついていたソ連兵もいた。しかし、抑留ボケで鼻水を垂れ、ひよろひよろしている私たちを見

て、ソ連兵が「日本人でなんとだらしがない奴だ」と笑ったが、人間というものは環境の動物だとしみじみ思った。

またこんな事件もあつた。炭坑で日本兵数人がソ連人のパンを盗んだと疑われた。怒ったソ連労働者に手斧で追い回されて、西森元義君などはもう少しで殺されるころであつた。ソ連語を早く覚えた岩崎中隊長の説明で、日本人でないことがわかつてやっと助かつた。ソ連労働者も食料が不足していたようだった。

ところで、ときどき行かう健康診断が変わつていた。丸裸にされて後ろ向きに集められ、ソ連将校が順番に尻の肉を引っ張り、やせ具合で等級をつけられ、一級、二級は炭坑行きだった。少々下品になるが、当時の男性の持ち物も後ろから丸見えできるほど、みんなやせさらばえていた。私も何度目かの診断で、特にひどくやせていたため、コルホーズの仕事に回してくれた。約一カ月余りの馬鈴薯掘りで尻の肉がつき、また炭坑に戻され

た。炭坑の仕事は重労働のため今度は心臓発作で倒れ、気がついたら収容所で寝かされていた。数日休養させてもらつて、今度は炊事係に回しつゝられた。

ラーゲリ内の炊事係は釜底の焦げなど若干のつまみ食いができるので、みんなの憧れだった。早速炊事係が役立つときがきた。台湾の九〇一海軍航空隊時代からずっと苦勞を共にしてきた入江正輝が疲勞と栄養失調で倒れたとき、夜中にコーリヤンの焦げをポケットに忍ばせ、運んで食べさせた。次第に体力が回復し、無事帰国することができた。いまだに会うたびに感謝されている。

その後も数人の命を救うことができた。そのありがたい炊事係も、体力の回復と同時にまた炭坑行きとなつた。炭坑での作業は山の真ん中にトロッコ用の坑道を掘り、そこから左右の斜め上に掘り進み、ダイナマイトで崩してはスコップで数人が順にトロッコまで運ぶ。その後に丸木で落盤防止の柱を立てていくという作業で、トロッコを

引く馬以外はすべて人力であり、厳しいノルマを消化するには、飢えと栄養失調の私たち虜囚には大変な重労働だった。

労働を終え坑内から出て来た日本兵は、誰が誰だかわからないほど顔じゅう真つ黒になつていた。炭坑の帰りには暖房用に石炭の塊を一個ずつ担ぎ、寒さと空腹と疲れでよたよたと帰る私たちを、ソ連の警戒兵たちも寒さと疲れで早く帰りたいのか「ダバイ、ダバイ」と足でけりたて銃剣でつつく。まるで奴隷のような惨めさであつた。

そうした中でせめてもの慰めは、二冬過ぎた頃から徐々ではあつたが待遇も少し改善されてきたことだ。穴倉住居から我々が丸木を積み重ねて建てた家に住まわせてくれるようになった。しかし生木だったので、じめじめと湿気が多く寒くて困つた。

またその頃になると、環境にも少しなれて死亡者も次第に減つてきた。そして言葉も話せるようになる人間関係もよくなり、理解し合うとソ連

人も個人的にはよい人達で、自分達も少ない「マホルカ」という青いきざみ煙草を新聞紙で巻いてのむ方法や、いつも食べているヒマワリの種子を口の中で噛み分ける方法なども教えてくれる親切な人も中にはいた。

ダモイ（帰国）

そうしたある日、突然身体検査があり、特にやせた者ばかり集められた。百人ぐらいたつたろうか。海軍仲間では私と伊藤忠則、麻岡誠郎（土佐市高岡町出身）の三人だった。

今度はどこへ連れて行かれるか不安だった。中には日本へ帰れるという噂もあつたが、だまされ続けてきた私たちは本気で信じることができなかつた。汽車に乗せられ、初めてソ連側から「ダモイ、トウキョウ」を告げられ、皆飛び上がって喜んだ。

しかし残された戦友、特に九〇一海軍航空隊の仲間である入江正輝、古市勝良、西岡一城、西森

元義、吉本政雄等、その他多くの戦友に申し訳なく、ただ喜んではいられない気持ちであった。

列車が止まった。ナホトカである。皆嬉しくて飛び降りた。昨日までは重い防寒靴を引きずっていたが、足取りも軽くナホトカ収容所へ入った。

ところが、至るところで先着の各部隊が隊伍を組んで、「赤旗の歌」「インターナショナルの歌」を競演するかのように絶叫していた。共產主義者にならなければ再び元の収容所へ帰され、さらに厳しい重労働につかされると聞かされた。

そこで私たちの部隊も必死で革命歌を歌った。しかも芋の子を洗うように競り合いながら、できる限り目にとまる場所を選んで歌った。民主教育の講義を聞くのも日本に帰るためならと必死だった。約一週間ぐらいで乗船命令が出た。みんな慎重だ。船に乗ってから降ろされた部隊もあると聞いたからである。埠頭まで歩いた。そこには懐かしい日の丸の旗を掲げた帰還船が横付けされていた。嬉しい、涙が出た。日の丸の旗を見て感激し

涙したのは初めてである。船のタラップを駆け上がるように昇って甲板に出て、最後のシベリアの景色を眺めながら、苦しかった、いや地獄のようだった抑留生活の様々な出来事を思い出していた。

何よりも生きて再び故国に帰れる幸を感謝し、後に残った同胞の無事を祈り、不幸にして異国に骨を埋めた数多くの同胞のご冥福を祈るとともに、なんとしても、後に残された同胞を一日も早く帰国させてやらなければと誓った。

船は静かに岸壁を離れた。これでもう降ろされることはないのだ。思わず万歳を叫んだ。

【執筆者の紹介】

昭和二年十一月十五日

高知県高岡郡佐川町川内ヶ谷

父 進、母 寿猪の長男として出生

昭和九年 佐川尋常小学校入学

昭和十六年 佐川実業青年学校入学

昭和十八年八月十日

佐世保相ノ浦海兵団に入団、十五歳

昭和十九年四月

第二台南海軍航空隊入隊、東港海軍航空隊配属、九〇一海軍航空隊派遣隊、上海龍華海軍航空隊へ移動、この間各地の戦闘に遭遇

昭和二十年五月十四日 元山海軍航空隊

昭和二十年十月二十一日

入ソ、場所はスーチヤン

昭和二十二年四月二十五日

大郁丸で舞鶴入港、数日後、実家に帰省

昭和二十九年十月二十八日 結婚

昭和三十四年

自宅で薬局開設

現在、従業員四十五人の会社社長として在職中
さらに特筆することは、昭和五十三年からソ連強制抑留者の補償等を政府に対して要求するため始められた全国戦後強制抑留補償要求推進協議会連合（財団法人全国強制抑留者協会の前の名称）結成のための先駆者の一人として、自社工屋の一

部を会議場とし、また高知県連合会が結成されるや、その事務局も自社工屋の一部を無償提供するなどして、連合会の要職を兼務し、県内の九市、二十五町、十九村にそれぞれ支部を設立する等に尽力された功績はまことに多大なるものがあります。

（高知県 東山 林）